氏　　名:	松江　なるえ
学 位 の 種 類:	博士(看護学)
学 位 記 番 号:	博看護第5号
学位授与の要件:	学位規則第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目:	複数教育機関の看護学生を対象とし、学生が認知する報告行動と実習経験、個人要因、指導者・教員のかかわり、ソーシャル・スキルとの関連
研 究 指 導 教 員:	廣島　麻楊
研究副指導教員:	李　廷秀
論 文 審 査 委 員:	(主査)米山　万里枝　　(副査)末永　由里 (委員)佐々木　美奈子　　(委員)種田　憲一郎

論文審査結果の要旨

看護学生は、臨地実習において患者の安全と学習目標を到達するために教員、指導者に報告・連絡・相談・確認(以下、報告行動)が必要である。報告行動には、実施前後の報告の他に、予定外の報告がある。学生は、積極的に考えを伝えることができないことやアドバイスがわからないときに質問できないなどソーシャル・スキルが不十分であること、指導者・教員の忙しさや威圧感などから報告ができないことがある。

そこで、本研究は、学生からの報告行動と臨地実習の経験、指導者、教員のかかわり、ソーシャル・スキルとの関連が明らかになれば、学生の報告行動を促進させるための実習事前教育に有用な示唆が得られ、学生が安心して実習に臨み、学習目標を達成し、看護実践能力の向上につなげるための基礎資料となるとして、設置主体などが異なる複数教育機関の看護学生を対象とし、学生が認知する報告行動を予定されていた報告行動と予定されていなかった報告行動それぞれについて、指導者・教員のかかわり、ソーシャル・スキル、報告にかかわる個人要因との独立した関連を明らかにすることを目的としている。

研究方法は、研究対象を看護系大学に在籍する実習経験 3 日以上経験した 2 年生から 4 年生とし、調査内容は報告行動に対する自己評価、報告行動の頻度、伝え方、指示・指導の受け方、個人要因、ソーシャル・スキル、教員・指導者のかかわり、実習経験、基本属性としている。分析方法は予定・予定外の報告行動それぞれに対する学生の自己評価を目的変数、報告行動の際の個人要因、指導者・教員のかかわり、ソーシャル・スキル、性、実習経験を説明変数とした多重ロジスティック回帰分析を実施している。

結果は、研究協力の同意が得られた 17 校の学生 701 人(有効回答率 22.1%)を分析対象として、予定の報告行動では 70.4%、予定外の報告行動では 48.6%であった。予定の報告では、報告行動に関する学習経験がある、指導者に対する肯定的な認知、ソーシャル・スキル総得点とは正の関連(オッズ比:それぞれ 1.66〔1.101-2.510〕、1.16〔1.068-1.251〕、1.05〔1.027-1.067〕)、報告が正確にできるか不安、報告を必要とする情報か判断の悩みがあったとは負の関連(0.56〔0.357-0.866〕、0.53〔0.304-0.930〕)がみられている。予

定外の報告では、指導者に対する肯定的な認知、ソーシャル・スキルの総得点とは正の関連(1.14〔1.066-1.228〕、1.03〔1.015-1.050〕)、報告が正確にできるか不安があるとは負の関連 0.64〔0.444-0.925〕) がみられている。

結論は、学生が報告を正確に行えるか不安を感じながらも安心して報告行動ができ、学生が適切に表現できるように支援し、不足している内容はわかりやすく具体的に説明するなど、指導者の肯定的なかかわりが必要であり、教員は指導者に対し、教育上必要な学生の情報を提供し、実習中の学生の学習状況を共有し、指導者と協力して学習目標が到達できるように支援すること、また、学生の報告行動を促進するためにソーシャル・スキルの向上に向けた教育支援が必要であることなどを明らかにしている。

これまで、このような視点に着目した研究は少なく、この点において独創性があると判断される。学生が認知する報告行動と実習経験、個人要因、指導者・教員のかかわり、ソーシャルスキルとの関連をみる研究は、臨床および学生教育上、大変有益なものとなっており、意義深く「博士論文として認定できる」と判断する。

令和6年2月7日

論文審査委員（主査）氏名　米山　万里枝